

平成 24 年 6 月 11 日

濱田 純一 東大総長 殿

(写) 関係大学各位 殿

根本 太

前略 率爾ながら、苦言を申し上げ、御立腹もあろうかと存ずるが、その失礼を御容赦願ひ度い。

何れの発案か存じ上げぬが、貴殿の名において、大学の秋入学なる構想が発表されている事につき反論を唱えるものである。

貴案の主たる理由は、グローバリゼーション (Globalization 国際化) の流れに於いて、海外からの優秀な人材を流入させる為、海外の主たる入学時期である秋期に合わせて、入学生乃至留学生を受け入れる様にする事と説明されている。

果たして、それが期待できるかと問われれば、答えは否である。理由は簡単明瞭、それは入学時期の問題では無く、質の問題、即ち学力研究レベルと又は研究費多寡の問題である。嘗て日本が技術力に裏打ちされた経済大国であった時代には、日本の伝統的な春入学でも各国から多くの入学、留学生又は技術研修の為、来日した事は貴殿も承知の筈。

しかるに大学生であっても分数計算もできない様な、現在の低レベルの日本の大学、又はスーパーコンに見られた様に No.2 でも良いと言う国家予算配分の貧弱な政治態勢の国に、秋入学だからと言ってそれでも留学する優秀な学生がいるとお思いか。余りにも単純無能な思考である。なかには ” Univ. of Tokyo ” ” 東大卒 ” と言う肩書きを得る為に入学する学生なきにしも非ずだが、貧弱な学術レベルにあっては、優秀な頭脳の日本からの流出はあっても、流入は期待するのは所詮無理である。それ以上に、単に秋入学だからといって、低レベルの日本に入学するより米国のほうが、まだましだと海外の学生から失笑を買うかも知れぬ。若し秋入学で海外学生が費用対効果を考慮して不幸にも期待ほどの学生数、優秀な頭脳が得られなかったら東大の面子丸潰れである。

翻って逆の立場から見ると、日本から米国のハーバード、MIT、スタンフォード等への留学生は入学時期の違いがあっても米国へ留学している。尤も今では入学したくても、日本の学生が低レベル学力で入学できず、数において韓国、台湾、中国の後塵を拝しているとか。この事は入学時期の違いがあっても、日本の大学が優秀であれば、いくらでも日本留学を希望する海外学生がいると言う事である。逆説的に言えば東大総長自らが日本の大学の低レベルを認めていることに外ならない。それが秋入学の所以であろう。

半年に亘るギャップタームにしても、今の若者にとって有効活用される保証は何も無い。焦燥感と無為な時間によりむしろ勉学に勤しむより、アルバイトをして遊興に現を抜かし、家庭の荷物になりかねない。そしてギャップタームのある事自体、経済的負担を含めて家庭からの怨嗟的になりかねない。

貴殿は現状における教育上に於ける何らかの問題点は把握しているが、認識の仕方が全く違う。即ち、大学レベルの立場だけで人材云々を言っているが、問題はそれ以前の教育過程乃至教育課程及びその内容にある、従って貴殿は方法論において誤っている。解決の方法が本末顛倒も甚だしい。筋道が根本的に間違っている。

本来なら、貴職の立場にあつては、

”日本の大学よ、もっと頑張ろう。そして春入学でも優秀な頭脳を日本に呼び戻そう”

=====

と檄を飛ばすのが使命、且つ任務でありそれが貴職責を果たす本分と存ずるが、如何か？

はたまた、貴殿は森を動かそうと言っているが、それは比喩的な意味で理解できない事もないが、実質的に貴殿は森を見ていない、単に木を見ているに過ぎない。そして空しい掛け声だけである。何故なら物事の本質を考えず思考が短絡的過ぎるからである。依って来る所以の原因を詳細に検討せず、入学の時期だけを変えれば良いという余りにも貧弱且つ単純な思考パターンの故である。

マスコミにおける本件に関する諸記事を拝見しているが、発起人が東大総長と言う立場を考慮して当たり障りのない記事に仕上げていると思うは僻目か。それを以て良しとし、自己陶醉に酔っているなら論外である。猛省を促す次第である。

貴殿はその道において、位人臣を極めたるも同然の最高の位置に座している身なれば然るべき見識を備えているのは当然と、一般市井人は一目置いて見ているものと思う。従って俗な言い方だが”あなたの申す事はご尤っともです”式である。しかしながら、一方に於いて国家基本の教育に関するその提案たるや何と安易且つ愚策であると言う受け取り方もある事を知るべきである。貴殿は自分自身の立場が何たるかを、又は何をすべきかを自覚していない。

入学時期の変更は東大の自由裁量の下にあるのかどうか存ぜぬ。少なくとも、文部科学省の承認は必要と愚考するが、本件は単に大学の入学時期の問題では無い、国家予算システム、教育システムおよび学生の就職、企業の採用等影響する所大である。

そもそも入学の時期はその国の国家予算の時期と関連するものである。日本においては3月が期末で有るが故に、4月入学なのである。黎明期の明治時代にあつては必要に応じて随時開校入学されたが、時代が進むにつれて現在の4月春入学に統一されたものである。

米国においては6月が国家予算期末であり本来は7月入学であつて然るべきだが、夏休みの関係上9月になったものである。日本では9月はまだ残暑厳しく秋とは言えないが米国北東部は既に秋である。東大の言う秋入学は9月を念頭に置いているのかどうか不明だが、季節感として日本では9月は秋ではない。秋入学と言うあいまいな表現では混乱するだけである。しかし本質的に入学時期の問題では無いとする立場からすればそれはどうでもよい事である。

最近、現政権、文部科学省が教育改革なる構想を発表しているが、”飛び級”なる単に時間の短縮だけが教育改革ではない。将来の日本を担って行く次世代の見識を高める教育なら、内容こそ重視されるべきである。戦後この事を看過してきたが故に、現在の日本の教育の貧困及び荒廃を招いている事を認識すべきである。

そもそも、グローバルゼーションなる言葉は、嘗て日本が経済大国であったが為に、国際化と言う美名のもとでの日本バッシング(日本叩き)であった事を想起すべきである。グローバルゼーション自体が日本にとって有利であった事は皆無である。繊維、造船、自動車、B I S規制等皆然りである。或る分野においてはグローバルゼーションの必要があるかも知れない、そしてその事を否定するものではない。しかしながら教育の分野は別の次元である。入学希望は時期の問題では無く、質の問題である。秋入学にしたとしても内容の伴わない学校に来る筈もなく、一方充実した内容を伴っていれば、たとえ春期でも入学希望者は居ると確信している。教育内容の充実が、時期より、より重要である事を認識すべきである。

この国際化の名目の下で、秋入学とは笑止千万、且つ片腹痛い次第、思い違いも甚だしい。何を好んで相手に摺り寄る必要があるのか。余りにも安易な考え、軽佻浮薄、且つ負け犬根性と言わざるを得ない。嘗て戦後の荒廃した時代に先人たちが粒々辛苦して築き上げた経済大国の上に胡座をかき、惰眠を貪り、貧して貪(鈍)し、座して喰らえば山をも空しの揚げ句の果ての選択が、秋の入学とは尾羽打ち枯らした最低の惨めな構想である。東大は相手に摺り寄ってまで外国の頭脳を借りなければならない程、零落れているのか。日本人たるもの、そしてその道の最高に位する人は矜持と面目を保つべきであろう。

秋入学構想について一流大学の錚々たるメンバーが参加しているが、真の信念あつての参加なのか、或いは東大の言う構想であるが故の単なる付和雷同なのか、一校の反対すら無い事自体驚くべき事態と考えざるを得ない。その是非について真剣に考慮すべきである。否 秋入学の構想そのものを否定すべきである。広く人材を天下または世界にもとめる事にやぶさかではない。その為には日本の大学が春入学でも海外から優秀な人材が来る様に、本来の質の向上に努めるべきである。

情情的に言えば、春の入学は将に青春を謳歌するイメージであり、秋の入学は人生も終わりの紅秋のイメージのみである。或いは晩秋かも知れぬ。

改めて、主張したい。秋入学は邪道である。堂々と高レベルの学術研究により魅力ある春入学の正道を歩めと。

教育は国家百年の計なれば、敢えて反論を為し、世論を喚起し世の判断を仰ぐ次第である。教育は国家百年の計なれば、秋入学を必要とするは姑息な手段であり、詭弁に過ぎぬ。

以上

2012年12月30日ホームページ寄稿時追記：

本文寄稿者の秋入学反対論に対して、秋入学賛成者は説得力ある合理的な反論をして下さい。

(単に海外から優秀な頭脳の流入を図る、或いは外国と足並みを揃えるは、論拠薄弱)

反論は、hanron.uketuke@gmail.comにて受け付けます。